

幸福社会に必須の多様（2022・10・27）

新型コロナウイルスが流行しはじめて以後、幸福という言葉が登場する頻度が増加している。当時の人口の二割以上が死亡した一四世紀の欧州のペストの流行、人口の数%が死亡した二〇世紀のスペイン風邪の流行と比較すれば、今回の死者は世界人口の〇・一%にもならないが、この流行により一変した世界の状況は幸福を希求させるのに十分な衝撃であった。

しかし幸福は定義次第という厄介な概念である。世界幸福順位という調査で日本は世界の五六位、人生満足指数で九〇位、幸福惑星指標で五八位である一方、健康国家順位で四位、安全国家順位で九位、世界平和指数で九位である。日本の位置のみならず、幸福惑星指標では南米諸国、世界幸福順位では欧州諸国が上位に集中している。

前世紀末に経済企画庁が地方の時代を反映し、一三八の指標を駆使して都道府県の生活環境の順位を発表したことがある。ところが下位になった埼玉や岐阜などの知事から強硬な反発があり、堺屋太一長官が身長、体重、視力を合計したような指標で順位を判定するのは問題という名言で撤回し、以後、順位は発表されなくなった。

このような曖昧な幸福という概念を地方銀行の頭取の経験もある宗教学者井上信一が以下のように定義している。財産を分子、欲望を分母として、その割算の数値を幸福の程度と定義し、財産の増加によって幸福を追求するのが西洋の思想、欲望の減少によって幸福を目指すのが東洋の思想という説明である。明快ではあるが実践は容易ではない。ブータンの先代国王ジグミ・シンゲ・ワンチュクは一九七六年に「国民総幸福量（GNH）は国民総生産量（GNP）より重要である」という名言により幸福国家を宣言し、一九九九年には「テレビジョンとインターネットに影響されない国民の知恵と良識を信用する」と両者を導入した。

それから数年が経過した時期に筆者はブータンを訪問したが、社会は一変していた。テレビジョンの影響で地方の若者は幸福を目指して首都ティンブーに集中し、一〇代前半の女性に幸福かと質問したところ不幸という回答であった。原因は衛星放送で紹介されるような海外の生活が地元では実現できないことへの不満であった。

情報が欲望を増幅することの危機は『旧約聖書』のアダムとイブが智慧の果実を味見して楽園を追放される寓話や、死亡して冥界にいるエウリディケを地上に復帰させるべく努力したオルフェウスが最後の一瞬に禁制に違反して振り返ったためエウリディケが冥界に逆行するというギリシャ神話にも登場する。

ノーベル経済学賞の有力候補である経済学者O・ガローの近著『格差の起源（原題は人類の旅路）』では、数十年前にアフリカから世界に分散したホモ・サピエンスは移動距離に比例して遺伝的多様性が減少してきたという現象が全体の通奏低音になっている。アフリカから遠方の日本は欧州に比較して多様ではないことになる。

同一の情報には価値がないように情報の本質は相違することであり、結果として多様な情報を創出できる社会が優位になる。現在の日本は情報社会の順位で世界の二八位前後、アジアだけでも六番である。それがガローの指摘する遺伝的多様性の低位によるものか、それ以外の要因によるものかはともかく、社会の多様を実現することが日本の重要な目標である。